

水稻・小麦栽培情報 5月号

令和6年4月16日

J A 柳 川

南筑後普及指導センター

【小麦】

1 生育概況

6年産小麦は、暖冬の影響で生育は早く推移していたものの、3月中旬から平年並みの気温となったことから、出穂期の中心は昨年よりやや早く推移しています。また、ほ場ごとの生育のばらつきが大きくなっています。

成熟期についても今後の気温が平年並で経過した場合、昨年より早くなることが予想されます。

2 収穫適期

11月下旬播種の小麦の出穂期及び予想収穫適期は、下表のとおりです。

出芽や生育が遅かったほ場は、出穂期や成熟期も遅くなります。本年は出穂期のほ場間差が大きいため、ほ場毎に生育を確認し、適期収穫に努めます。

品種名	出穂期	予想収穫期	備考
シロガネコムギ	3月28日中心	5月23日頃から	播種時期、出穂期によって予想収穫期は異なります
ミナミノカオリ	3月30日中心	5月26日頃から	

※収穫期は出穂後の平均気温積算による方法で予測。

※今後の気象条件により、収穫適期は前後することがあります。

※収穫の際は、必ずJAが定めた荷受計画に従ってください。

※高水分で麦を収穫するとフレコン内で赤かび病が蔓延することがあるため、荷受前日の収穫は避け、収穫後はただちに乾燥させます。

3 雑草について

カラスノエンドウ（マメ科雑草）の種子は小麦の収穫時に混入すると、調製で除去できないため、検査等級を低下させる原因となります。収穫作業前に、ほ場内のカラスノエンドウを除去するとともに、次年度以降の発生を抑えるため、畦畔部も除草します。

4 収穫後の麦わらについて

麦わらは焼却せず、土づくりのためにすき込みましょう

わらすき込みの効果

- ・すき込みにより、腐植の低下を緩和し、地力を維持できます
- ・土壌が軟らかくなるため、耕うん作業が容易になり、また根の伸長を促します

<水稲作前の麦わらすき込みのポイント>

① 深めに耕起する

- ・麦わらが短いと浮き上がりやすいため、やや長め（20cm程度）に切断します
- ・麦わらが田面に残らないように、やや深めに耕して土中へ埋没させます

② 代かきの水は最小限度で（瀉かき）

- ・尾輪の跡に水がたまる程度のごく浅水で、荒代かきを行います
- ・麦わらの浮き上がり防止のため、代かきのときはロータリの回転は遅くします

③ 基肥を増肥

- ・麦わらの分解の際に発生する有機酸が水稲の発根を阻害するため、麦わらをすき込んだほ場は、窒素成分 2 kg (硫安の場合は 10kg) / 10a を増肥して、生育を確保します

※生育期間が長い「実りつくし」は、増肥は不要です

④ 田植え後の水管理の徹底（間断かん水でガス抜き）

- ・麦わらの分解で発生するガスにより、稲の活着が悪くなることもあるため、水管理を徹底します
- ・田植え後、除草剤散布までの間は浅水とします
- ・除草剤散布後 1 週間は湛水し、その後は間断かん水してガス抜きを促進します

<大豆作前の麦わらすき込みのポイント>

① 麦わらの細断

- ・播種の際に回転ロールに支障がないように麦わらを細断し、ほ場に均一に散布します（特に枕部分）

② すき込みの時期

- ・排水性維持のため、麦収穫後のほ場は耕起せず、麦うねを残した状態にしておき、組作業で大豆の播種直前にすき込むか、部分浅耕一工程播種で播種と同時にすき込みます
- ・やむを得ず事前にすき込む場合は、麦収穫直後にできるだけ浅くすき込みます

③ 播種

- ・耕起時の碎土、播種後の鎮圧をしっかり行い、出芽率を高めます

【水稻】

1 播種準備

(1) 種子消毒

JA から配布された種子は、農薬が粉衣されています。(種子に着色)
消毒済種子は、浸種することで効果を発揮します。種子重量の2倍の水に消毒済種子をゆっくりと浸します。

※種子消毒後は、水洗いをせずに浸種します。

(2) 浸種

浸種は、籾から芽が少し出る時期まで行います。(鳩胸程度) 浸種期間の目安は、種子消毒の期間を含め4～5日程度です。芽が伸びすぎると、播種時に芽を傷めるため注意が必要です。また、浸種期間中は1日に1回水の交換を行います。

2 播種

育苗日数が20日の場合、播種量は乾籾140～160g/箱程度です。育苗日数や移植時期から逆算して播種期や播種量を調整します。

育苗日数が長くなる場合、播種量を減らして苗が老化しないようにします。

3 育苗

播種後は、カビや病害の発生を防ぐため平床出芽を行います。

寒冷紗を2重に被せ、5～7日程度(苗長3～4cm)で1重にし、その後2～3日程度(苗長4～5cm)で完全にはがします。寒冷紗をはがす際は、日中を避け涼しくなった夕方に行います。

灌水について、2重被覆期は1日1回を目安に、その後は苗の生育に応じて回数を増やします。過度の灌水は生育を阻害するため注意します。

なお、「元気つくし」、「実りつくし」は「ヒノヒカリ」と比較して、伸びやすい特性があるため寒冷紗は早めに除去します。

4 土づくり

代かき前に、ミネラルG(ケイ酸と鉄分の補給)やとれ太郎(ケイ酸の補給)、ケイ酸加里(ケイ酸と加里の補給)、アヅミン(腐植酸の補給)、土力の素(腐植酸と加里の補給)等の土壌改良材を投入して、健全な稲づくりの下準備を行います。

5 施肥

籾数過剰による粒の充実不足を防ぐために多肥(特に基肥)栽培は避けます。

「実りつくし」は、地力の影響を受けやすく、過剰に施肥すると倒伏の危険性が高まるため、稲作こよみの施肥基準を必ず確認し、多肥とならないように注意します。

詳細はこよみを参照してください。